

PAVE EN FANDE



魅せられたる魂

Ⅲ

ロマン・ローラン

宮本正清 譯

現代世界文學全集

32

新潮社 版

現代世界文學全集 32

魅せられたる魂 Ⅲ

“L'Âme enchantée”

by

Romain Rolland

Originally Copyrighted by Albin Michel, Paris.

This book is published in Japan by arrangement with Albin Michel
through the Bureau des Copyrights Français Tokyo.

昭和三十一年三月二十六日 印刷
昭和三十一年三月三十日 發行

定價 參百五拾圓
實價 參百六拾圓

譯者 宮本正清

發行者 東京都新宿區矢來町七一
佐藤義夫

發行所 東京都新宿區矢來町七一
新潮社

電話東京(34)七二一八番
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷
製本

三晃印刷株式會社
荒木製本所

Printed in Japan

目次

第四卷 豫告する者 (上) — 續 —

第三部 六

第五卷 豫告する者 (下)

第一部 八六

第二部 一八九

第三部 三三四

“L’Ame enchantée”

by

Romain Rolland

Originally Copyrighted by Albin Michel, Paris.

This book is published in Japan by arrangement with Albin Michel
through the Bureau des Copyrights Français in Tokyo.

本書はフランス著作権事務所を通じ、原著作権者アルバン・ミツシエル書店
との契約に基づいて、日本に於ける独占翻訳出版販売権は新潮社が保有する。

魅せられたる魂



第四卷 豫告する者 (上)

— 續 —

ひとつの世界の死

第三部

罪の風

その頃、シルヴィは自分の甥のことを思い出した。事業と快楽に對する彼女の熱狂は冷めてしまつた。風が出る、と、一吹きだつた。彼女の富と健康に入つた大きな罅は、身の始末をつける時機が來たことを彼女にきつく告げた：『走つても何にもならない。心得べきは……』時機を見て止ることだ！ 美食が過ぎた、美酒が過ぎた。眼は血走つてゐた。狂氣じみた怒りや、馬鹿笑いが突發した……：そうしたことがあつた後で、ある夜食の際に、彼女はほとんど腦充血になりかかつた。彼女は了解した、彼女ははつきりと、空想なしに自分を見た。發作の最中でさえ方向を見失つた時でさえ、彼女は自分に言つた。

「お前は脱線しかかつてゐる！ プレーキをしめなさい！」しかしプレーキが思うようにきかなかつた。頸部とこめかみの動脈が鼓動してゐた、そして囁語を言いはじめた……：ストップ……！……彼女が決心して、一夜の中に店舗を閉鎖し、ホテルを賣り、現金に代えた。彼女の馬鹿なギーコキーンはつぶれてしまつた。腐卵のように、銀行と幾つかの國家の破産のために。何故かという、當時は香水屋どもが、政治に一役演じたいという虚榮から、女を圍うと同じように、政府を維持してゐたから。それに彼らはいい加減

の署名をして、着服した後は、恥も何もなく相手を騙した。彼のためにはいいことだ！ そんなことは少しもシルヴの安眠を妨げはしなかつた……：がしかし彼女の眠りは亂れた、機械全體を休ませ、分解して、油をさす必要があつた……：彼女は下劑をかけ、芥子泥をぬり、過剰な血を水蛭に吸わせた。そして中流の、家庭的な生活をはじめた。

彼女はそうした家庭をもつてゐた。彼女は他人の生んだ子をひきとつて、とうとう法律上からも養子にしてゐた。十四から十七までの子供が三人だつた。母親のペルベチュパッスロー——（彼女はこの獅子鼻のベルヴィル者にカルメンという、小驢馬に麥藁帽子が似合う程度に似合うとてもない名をつけた）——は彼女の以前の仕事仲間で戀愛仲間だつた。それは彼女の最初の戦いを、パリの辛いデビュを思い出させた。二十五年間の忠實さ。シルヴィは自分の昔の犬どもを忘れたしなかつた。たとえそれが少しどうかした、少し氣の狂つた、不恰な、頓馬で、しよつちゆう彼女が拳固を見舞つたことのある者でも、邪魔なペルベチュのように、怨みもせずに彼女の頬を舐めにくる者のことは忘れなかつた。この女は愚かな結婚をした、そして、善い神様は彼女をこの結婚から解放したが、彼女の無法からは解放しなかつた。良人は浮氣者で、酒呑みだつたが、戦争で行方不明になつた。カルメンは急いで代りを見つけ

た。シルヴィのような際どい平衡はもたないのに、シルヴィの空想と贅澤すぎる手本をまねた。彼女は情人たちの喰い物になった。ある賭博者に絞りとられ、剝ぎとられた。その男は（この上もなく巧妙な手で、彼女に強請はせずに）彼女に身賣りさせて、金を捲きあげた。しかし善良な女で、働きの者で、快樂の酔いから醒めなかつた。彼女はいちばん悪い時機にも、その宿命的な上機嫌を失いはしなかつた。そして結局は、去るべき時が來たときに、非常に人情に篤い一人の牧師の腕に抱かれて天晴れな往生を遂げた——がしかし自分の罪を心から悔い改めることはできなかつた。それを眞正直に言つたが、しかし牧師は聞いて聞かぬふりをしてゐた。彼女もまた、従順に、彼の口授にしたがつて悔悟を『牧師を喜ばせるために（彼女はそういつた）』ぼつぼつと唱えた。彼女は自分の死ぬのを何の感激もなしにみた、ただしかし子供たちのことを思つて一滴の涙を流した。しかし子供たちはシルヴィが引き取つてくれるので、すつかり安心した。そしてほとんど最後の瞬間まで、よい生活（いろんな不幸にも拘らず）や、よい仕事や愛人のことをシルヴィと話した。

三人の子供はベルナデット、コロンブ、アンジュというやさしい名をつけてもらつてゐたが、各自その韻律にしたがつて、この小さい幸福や、小さい不幸をもつた生活——彼らの早熟な經驗にむきだしに提供された生活に對應した。下の二人のアンジュとコロンブは雙兒だつた。この二人の母親が死んだ時には十三四歳だつた。ベルナデットは

十六だつた。男兒は溫和しく、勤勉で、家庭的な氣質で、敬虔な神祕的な渴望を示したので、牧師たちに拾ひ上げられた。早くから牧師になることに方針を定めた。雙兒の一人である妹に感化を及ぼした。その妹は褐色の頭髮に仔驢馬のような美しい眼をして、優しく、ぼんやりで、肉感的だつた。彼ら二人は特別に仲がよく、寛大に愛し合つた。信心深いアンジュがコロンブの中に愛してゐたものはまさしく神だつた。ところがコロンブはすでに、神を愛するのに、青年——（神の姿だからだ）——を愛する本能を素朴ながらもつていて、この本能は彼女の生涯を支配した。この清淨な、欲深い、まつたく無邪氣なうとけた話を、姉は皮肉な無頓着さで眺めていた。彼女は番いらしい心はまるでもたなかつた。自分だけの生活をもつていて、他人に少しも知らせはしなかつた。ほとんど自分自身にさえも。あまり自分を知ろうともしなかつた。およそ誰も彼女を識ることはないだろう。彼女は、一九一九年から一九二〇年頃の放縱な享樂に夢中になつてゐたパリの環境と接觸した小娘の頃の生活に『蹂躪された』一人だつた。彼女は狂つた小鳥たちが火中で火傷をするのをみた。そして本能は、火に對して彼女を護つた。彼女は那些人々を道德的に咎めはしなかつた。道德は彼女の思想の中では微かな地位を占めてゐるにすぎなかつた。彼女にとつて、問題は、秩序と、道理と、清潔——ことに外部の——だつた。つまり身體と家、生活のしかただつた……彼女は母親の生活の『行きあたりばつたり』にあまりにも苦しんだ。それだから本當の

心からの宗教なしに、宗教の外部的な骨組をうけいれた。母親の経験がそうだったように、不幸な経験をさけるに必要な制限力をそこに認めた。自分の生活に入れてさしつかえないもの以上のことを考えない、これが彼女の場合には一身の安全のための本能的法則だった。それはメーヌ街のプチブルジョアのそれと同じように、狭く、露骨で、しかも整った、現實に對する彼女の冷たい鋭い感覺を少しも損うものではなかった（むしろその反對だった！）。それは彼女の情熱の生活（その鍵は彼女ひとりでもつていた）にそれ以上影響は及ばさなかつた。彼女はのかさかさの手で財布の紐を全部締めていた。決して愛情がもてないわけではなく、激しい愛情さえもてないわけではなかつたが、自分にいちばん近く接觸している人々に對してさえ、自分の生活と同じ程度と思われる生活區域に對して、自分の力や關心を注ぐにすぎなかつた。それ以上のことはほとんど興味がなかつた——二人の弟妹の不可解な遊戲も、シルヴィの突拍子もない氣まぐれ、マルクの精神生活（シルヴィが絲をひいて踊らせていた）——そのことは追つて述べることにしよう——などには興味がなかつた。彼らが思つてゐることをとかく議論する氣は毛頭なかつた。自分の小さい、尖つた、曲つた禿鷹のような鼻を突込みはしなかつた。（といつても、やる氣になれば、たちまち鋼の中にその鼻を突込んだであらうが）。しかしめいめいが自分の鋼をもつてゐるのだ！ 彼女は自分の鋼の泡をとることにかかりきりだつた。それに彼女はなかなか利口だつたので、自

分にばかりあまり熱心な關心をもつてゐることを他人にあまり露骨に示さない方がよいということを心得ていた。他人が興味をもつてゐることに自分も興味をもつてゐるような振りをしていなければならぬ。シルヴィでさえその點では見當違ひをしてゐた——少なくとも彼女に關しては、他の人々のことでは、彼女は、自分のお弟子がそんなに器用に絲を操るのにわるい氣はしなかつた——（彼女は騙されるような人々を好かなかつた、しかも彼女は騙されてゐた）——彼女の弱點をとらえたベルナデットは、自分の狡い觀察をシルヴィに打ち明けた。しかも人々に對してシルヴィがひそかに好意または惡意をいだいてゐる模様に應じて、その刃尖を加減した。そして皿を手にしている主人のふくらはぎに體をすりつけてくる瘦猫のような甘言をシルヴィのためにとつておいた。彼女がぐるぐる喉を鳴らしたり、背を丸くするのは全然つくりごとではなかつた。瘦猫は皿をもつた手を好いてゐた。十六歳のベルナデットは「千一夜物語」の女王になることを理想としてゐた。パリの若い仕立人仲間の眼にはシルヴィがその代表的存在だつた。シルヴィの享樂と空想を模倣するだけの能力をもたないまでも、自分の金を貯めることはできると彼女は感じた。そしてそれをしてくれたシルヴィに感謝した。シルヴィは、何も貰わないと意地をはるアンネットとマルクが駄目なら、ベルナデットを特別の後繼ぎに指定する意圖を娘に匿さなかつた。そして遊戲に得意な彼女は、自分の金をマルクに強制的に受取らせるために、ベルナデットの寢臺

に彼をはめ込もうと企てた。彼らを結婚させようとした。それを兩人の耳に入れるという馬鹿なことをした——（どんなに利口な女もこのことにかけては馬鹿なものだ）。冷たいベルナデットは葡萄棚の支柱のように燃え立つた。マルクは傲然として葡萄畑を去つた。もし勝手に探させておいたなら或は麝香の匂いのするこの葡萄を——（或は）——賞味したのかも知れなかつた。ところが相談もなしに、自分のことを勝手に定めたことを彼は憤慨した。狐が葡萄の木に小便をひつかける理由はそれだけで十分あつた。そこで、ベルナデットについては、彼は肉體的にも精神的にも癪にさわる點しか見なかつた。

しかし彼女には魅力がないわけではなかつた。彼女の瘦身はしなやかで、いい恰好だつた。少し褐色すぎたが、それでも風味はあつた（瘦せているということは官能の母である、又は母でありうる）。ことに彼女は、自分の缺點を巧みに利用するパリつ兒の技巧をもつていた。ほんの少しばかりの化粧、單純な自信のある好みの服裝、申し分のない線……それはシルヴィの鑑定にとつてはいちばんつまらない點ではなかつた。彼女はタナグラ（註 ギリシヤの町で美しい胸氣の人の形が發掘された、ここではよいモデルの意）にだつてなれた筈だ。——ただし百舌鳥のようなその頭は別だが。しかしその頭——小さい、丸い堅い頭さえも、決して線を傷つけることはなかつた。彼女には一種のスタイルがあつて、全體のスタイルはまとまつていた。また、自分でその氣にさえなれば（マルクが彼女を眺める時に限つていたが）その青緑色の眼は輝きわたつた。その

眼は優しくなり、才氣が溢れた。この眼に呼ばれたら死者も甦りそうだつた。しかしその結果は、マルクに對しては、彼の反抗を買うことになつた——欲しくもないくせに、彼はそれに興奮を覺えたので、憤然とその刺を引き撈つた。

シルヴィには、自分が贈る幸福をなぜ甥が欲しがらないのかわからなかつた。丈夫な上等のパリ製品だつた（彼女は眼が利いた！）。粗製品ではない。長持ちするようにできた良い生地だ。たとえ胸が磨滅すりへらされても、胸衣は磨滅すりへることはなからうというわけだ——娘は誠實で、働き手で、氣が利いて、（その上にまだ遺産もあつて）活潑で明瞭でしかも實際的な才智があり、なおその上に、この下等な猿に無垢な處女性と戀にかけては全く初心な、彼一人に焦れている心を持参しようというのだ……この尾卷猿……！ベルナデットは彼女に眞情を吐露した。そこで口やかましいシルヴィは内心では、悦びながら、あんなるくでもない男、醜い、愚かな、傲慢な、ヨブのように貧乏な、そして、ヨブのように氣むずかしい若者——（彼女はそう考へていた、それだからなお彼が好きだつた）——に戀い焦れるなんて恥ずかしいことだ、もし彼女と結婚したら彼にはありがたい幸せだと言つた……しかし、もしベルナデットがシルヴィの言つたことを言葉通りにとつて、自分の考へとして傳へることはよくなかつたらう。もし『自分は甥の靴の紐を解く柄ではない』とシルヴィが言つたら、彼の耳には薬になつたことだらう。彼女はひどく彼を自慢にしていた！シルヴィは、マルクが子供の頃、初めて半ズボンを

穿かせたり脱がせたりした自分にしか、彼を貶す權利はないものと思つていた。頭のでつぺんから足の爪先まで彼をわがものと思つていた。それにしてもあの馬鹿野郎は、ひとが折角寢床をしつらえてやつたのに、なぜ入るのを拒んだのか？　あまりマルクを愛しすぎると言つてベルナデットに恥じ入らせた後で、マルクの愛をうる術を心得ないと言つては彼女を辱しめた。それはベルナデットの誇りにとつては、何よりも痛い點だつた。彼女たちは、この初心者

をどうして捉えるかに二人とも腐心した。動機がよいのだから、どんな手段も合法的だつた。口に紅をつけると同じように、思想を粉飾することさえ構わなかつた。シルヴィは、マルクが關心を寄せている知的問題または社會問題に興味を示して、この小かますを釣り上げる方法をベルナデットに教えた……（憐れな氣の狂つた男！　すべての男は多少ともそうなのだ……）ベルナデットはそうした教訓を良心的に遵奉しようとした。ところが彼女の立派な努力の結果は、すでによくなかつた情勢を一そうわるくした。

人は肉體と同じように精神を製造することはできない。この中産階級の娘は決して馬鹿ではなかつた、がそれには自然の限界があつた。その埒外に出ると、彼女は氣どつて、句讀點もなしにべらべら暗誦した。百舌鳥が鸚鵡になつた。マルクは自分が受けた印象をかくすような禮讓はもたなかつた。面目の潰れたベルナデットは決してこの前進地でためらつてはいなかつた。彼女はシルヴィとの誓いを、シルヴィには一言のことわりもなしに、投げすてて、自分

の陣地に退却した。それはもつともだつた。しかし闘う場合には、もつともなだけでは大いに足りない。必要なのは勝利だ。勝利はてんで得られなかつた。

もはや彼のためにミサに奉仕しようとはしないで、ミサを唱える資格をすつかりマルクにささげようとした——（彼が欲しそうなものを。それは彼女にはどうでもよかつた！）——その間に禮拜堂の番をし、整頓し、埃を拂うことにしよう。彼には説教壇と祭壇。彼女には聖水盤の世話。そうしたら、この問題は申し分なく處理されるのではなからうか？　彼は思うがままに言つたり、考えたりできるだろう。彼女は道具の世話をするだろう。それはつまらないことではなかつた！　彼女にとつては、それで十分だつた、もし良人をつかんでいさえすれば。その他のことは彼女は望んでいなかった。

マルクはその他のことばかりに執着していた……もちろん！　娘を腕に抱いての話だ、美しいにしても、醜いにしても、彼の氣に入るような娘を……ベルナデットは彼の氣に入らなかつた。彼女が餌として彼に提供しようとしていた物質的保證なんか、彼はてんで問題にしていなかつた。もつとわるいことには、彼はそれを警戒していた！　あまりに完全な安全は、マルクのような者にとつては、まだ始めもしないうちに終つたことになるのだつた。彼は自分から逃れ去るもの、そして捉えるためには危険を冒さなければならぬものを追求していた。ベルナデットのような者の安全は、あまりに安々と手に入るのだつた。あまりにも

少ない彼女の知的要求は二十年もたないうちにその庭を——中流家庭の小さい内庭はなお更のこと——閉め切つて、自分の町以外に起ることは氣にかけなくなりそうだった。ちやうどカセツト街のブチブルジョアたちがその通りで革命(註一八七一)の最中に、他の町内に火災を起した戦鬨にも氣づかなかつたのと同然だつた……マルクは、都會の端から端まで、火藥を吸いこみ血の匂いを嗅いでいた。自分の足元に思想の宇宙全體が崩れるのを感じた。彼は生きる必要があつた、そして頭まで大地の革命の泥に入り、奇怪なお産に立ち會い、力を貸さなければならなかつた……ベルナデットは顛覆ということを決して知らないわけではなかつた。パリの娘は誰でも新聞でそれを讀んでいる——パリの小さい消息、雜報、新聞小説、流行、スポーツ、それから廣告などを讀んだ上で——もし暇があれば！　まず爲すべきことをしなければならぬ、道樂をするために生きているのではない！『支那で起つたことや、われわれがロシアに投資した金の泥棒ボルシェヴィキたちのところで起つたことを議論して時間を浪費するのも男たちにはよいしい！』自分の仕事、自分の勘定、それから自分の食卓と自分の寢床の世話を、清潔な整頓した住居でしていればいいのだ、外部の途方もないことなどに氣を配らないで。そんな事はやつて來たと同じように行つてしまふだろう……理論なんて彼女には空想と思われた。彼女は全體の道德的、社會的慣例で満足していた、それはがっちりした中産的時代の勤勉と節約によつて試煉をされ、かためられて

いる。宗教もその中にその地位を占めていた——即ちカトリック教で、決して強請的でなく、信仰心があつてもなくともよく、ことに實際的で規律的で、秩序に貢獻し、それを強化するものである。この點ではベルナデットは信仰をもたないシルヴィとは違つていた、シルヴィはどうしたつて『坊主』を嘲弄せずにはいらなかつたが、しかしこのお弟子に勝手にさせておいた。鷹揚な冗談を言つて、女というものは、似而非信心でも少しある方が「結局」良人にとつては家庭安全のひとつの保證になるのだと獨り言をいうのだつた。

それは「結局」それほど確かではなかつた！……外見は、穩和で、突飛な點のない、このベルナデットは月の三週間は冷靜で分別をもつていたが、後の一週間は奇妙な混亂を呈した。彼女の性質が變つた。物事や人を判斷するにも、論ずるにも、同じ眼、同じ頭でしなかつた。彼女はもう自分の方向を定めることがでなかつた。溝や道の上の樹木に注意すべし！　機械はそこらにぶつかりたい誘惑を感じてゐるようだつた……そうした危険は慢性だつたので、ベルナデットはそれがやつてくるのを聴きわけることを心得ていた。それで、それが來ると、彼女はなるべく人から離れてとじこもるように努めた。目立たないようにするために、非常な自制力を要した。しかし彼女の内部には、またこゝろした時期には、憎しみと愛、欲望、羨望、嫉妬など、腹や頭からくるあらゆる發作、満たされない、無拘束な性情のいちばん悪い想像がうろつき、つけねらつていた。い

ちばんひどい虚偽に間一髪というところだつたろう。しかし人は、彼女の首を突然に濡らしたり或は又逆流して頬に綠着白色をとどめたりする薄紅色の濡によつてそれと氣づくに過ぎなかつた。彼女は轉で自分の口を傷つけながら慄え上つた。氣絶しかかるのを覺え、やつとのことで停つた。それは結局あらゆる危険とあらゆる苦しみを勘定したところで、一つの愉快だつた。彼女はひとりですれを味わつた。

マルクはそれを想像するところからは遠かつた。しかも、もし彼がそのことを知つていたら、或は彼女に興味をいだきはじめてのかも知れなかつた。彼は、危険なもの、漠然たるもの、混亂の深淵に、愚かにも本能的にひきつけられるといった種類の人間だつた。何故なら温かな夜は豊かさを約束するのに、平凡な晝は安つぽくしてしまふ。そして彼らにとつて、單調ほど怖ろしいものは人生にないのである。その點では、不幸にも彼はまさしくアンネットの息子だつた！……（彼女は、一度ならず、そのために苦しまなければならなかつた。しかも彼女のいちばんひどい悔恨は自分の伴が彼女のために苦しんだということだつた：……）たとえマルクがベルナデットの心の底に、異様な形の爬蟲類的な生命が泥沼の中にうごめいているのを見たなら（それはわれわれのほとんど誰の内にも動いている）、彼は沼の平凡な表面、單調な中流の少女の冷たい生活に拂う以上の注意を彼女に拂つたにちがいない。

ベルナデットに比べて温良（わんりやう）しくないシルヴィが、聰明な節約をして自分の家庭の領分だけをきつちり治め、それだ

け良人に外界で自由をあたえておくような妻をもつことの利益をいくら甥に説いて見たところで無駄だつた（ベルナデットは構わないくれと彼女に嘆願したが）。しかし自分の年金と妻とを切取割符で手に入れて、證券は銀行に預け入れておくというこの「地主的」家庭の理想は、家の中にとじこもつていられないわれわれの時代には通用しなかつた。現代は不斷の移動を欲する——『漂泊者』時代の再來である。妻はその『旅人』にとつては伴となつて、その不斷の不安定、身體及び思想の日々の不安を共にしうるだろうか？それが問題だつた。——この問題がベルナデットに與えられたなら、彼女は家をあきらめる溜息とともに、しかしきつぱりと——彼を愛しているのだから！——答えたにちがいない。

「ええ、そうしたいと思います。だからできます」

そして彼女はそれができたかも知れない、少なくとも一時は……彼女は雄々しかつた。彼女は自分の欲すること、自分の愛するもののために、どんな危険も冒したのである。しかしこの「ええ！」がいかにか眞剣であつても、肉體だけはそれについて行かれただろうが、精神は駄目だつた。彼女は自分の意に任せられる以上のものまで約束したにちがいない。どんなに彼女が専心しても駄目だろう。彼女はわが家の外で、迷ひ、途方にくれたに相違ない。そしてきつと反動的に出たにちがひなかつた（それは彼女の權利だつた）。それは男の踵に石をしぱりつけて、後に引きもどすことになつたであらう。結局のところ、妻の怖るべき無氣力

が男性の躍進力を制して、彼は登山に重荷を曳き摺つて行くことになつたであらう。

マルクの本能は不本意ながらも自分の幸福を作るのに、シルヴィの勘定よりも賢明だつた。しかしシルヴィにしても彼が首を折るようなことがないように、彼を行かせまいとして彼の足を縛つておくことは別に辛くはなかつた。二人の女、女元帥と女新兵との間には、互いに口に出しては言わなかつたが、その點に關する默契があつた。ところが疑い深いマルクの鼻はそれを嗅ぎつけた。彼がベルナデットに反感をいだくのに譯はなかつた。シルヴィが彼女のことを讃めそやせば讃めそやすほど、マルクはぼろくそにいつた。それが雙方からひどいところまで行つたので、シルヴィは彼に否か應かの決心を求めた後に、例の卒中的な癪癢を出して、爆發しそくに眞赤になつて、憤然として、扉をマルクの面前で音を立てて閉めた。

「勝手にしなさい、破落戸め！ うんと苦しむがいいさ！」
若い破落戸は一向平氣だつた。

ベルナデットはキュサンドロンのように懊の上に坐つていた——雄々しく、冷然たる顔をしていた、火と怨みとを錯のかげにかくし持ちながら。

*

ある日マルクはポケットに食事のために費すべき金が四五フランしかなかつたので、コーヒー店に飲みに行つた——（なに！ 極端なことはしないさ！）彼は無茶を實行し

ようにもその手段をもたなかつた……しかし、今朝のように、疲れ、厭な氣分で、食欲のない時には、質のわるい、粗末にしつらえた、厭氣を起させるような肉を無理につめこむ勇氣がなかつたので、黒コーヒーと一杯の搾糟（それ）は彼の胃には悪かつたが、興奮劑になつた）を飲む方を選んだ——彼はそれに一つの刺戟劑として新聞を読むことを加えた。ある日刊の第一頁で、彼の眸は、恐ろしく不恰好に變つてゐる一つの肖像の上に落ちた。しかし彼にはそれが一目でわかつた。眼の上に突き出た、太い皺が刻まれたその低い額、怒つたゴリラのようなその面……シモン……シモン プーシャルだ……たしかに彼だ！ その顔の上に肉屋は肉の陳列板の上に大見出しで廣告していた。

『急行列車の殺人。惡漢逮捕さる……』

マルクはそのコニャックの小さいコップをひつくりかえた。彼は讀みながら見えなかつた。無理に一語一語を噛み碎きながら讀み直した。事實は何の疑う餘地ものこしてなかつた。パリからヴァンティミルの急行列車、ディジョンとマコンとの間で、夜中に、就眠中の一旅客が、寢臺の上で絞殺された、犯人は、車室から出るところで發見され、進行中の列車から飛び下り、砂利の上に轉げ落ちて、逮捕された。彼の顔面は腫れ上り、大腿骨が碎けていた。犠牲者はバリの知名の士で、實業家で、多數の會社の重役だつた。殺人犯は方向を誤つた一インテリで、無政府主義者で、

共產主義者だつた……ブルジョア新聞にはどうしてもこの兩者の區別がつかなくなかつた……（新聞は實際以上に馬鹿に見せかけているが、兩者を混同する方が新聞には都合がいいのだ！）もちろん、『事件の裏にモスコイの手があつた……』のだ。

マルクは驚倒して、コーヒーを半ば飲みさして出てしまつた。彼は自分が何をしているのかわからなくなつた。大通りで彼はくりかえしていた『シモン！……シモン！……』通行人にも氣づかないので、歩きながら夢中遊歩者の本能から通行人に衝突しないまでも觸つた。彼はブーシャルと一緒に過した初めの頃のことを混沌と回顧した、あたかも自分が裁判所にいるかのように、無意識の自衛手段のために。彼が思い泛べたのはことに彼らが識り合つた最初の頃で、ブーシャルはやつと田舎からついたばかりで、垢抜けのしない、潔白な、無疵な、礫石のように硬い男だつた。いつこくなベルシュ馬のような彼の誠實さを感じた。そのがつちりした頸や曲鋏や鑿の固さにも少しの嘘詐りもなかつた。彼の側にいると、マルクは、大都會の中を彷徨するあらゆる腐敗の種に對して、自分がどれだけに保護されていないか、それに侵されそうで、危険に曝されているかを感じたものだつた！ もしマクベスの中の妖婆が彼らに『二人の中一人は斷頭臺で殺られるであろうぞ』と言つたなら、マルクは驚き畏れて、その神經質な手を自分の首にあててみたことだろう。彼は相手をそれほど信じ、自分をそれほど信じていなくなつたのに！ 相手はどうしたの

か？ 人は彼をどうしたのか？ 人々とは誰か？ すべての人だ！ 戦後のこの怖ろしい世界全體だ。そして第一にわれわれだ……彼の眸はあるコーヒー店の露臺で、彼が來るのを眺めているヴェロン コカールの大きな眼にぶつかつた。彼は冷笑していた。マルクは食卓の列を横切つた。そして腰を下さずに、壓しつけられたような聲で言つた。

「ヴェロン、知つてるか？」

ヴェロンはその冷笑を少しも止めなかつた。彼は言つた。

「知つてるさ。あの白痴は捕まつたね。俺はそれを待つていたのさ！ 血を搾られるだろうよ……」

マルクは憤然として血をみるような氣がした。シモンの血が彼の眼に迸つた。彼はヴェロンに躍りかかつた。そして相手の太い首を掴んで、コーヒー店の壁に押しつけて叫んだ。

「人殺し！……貴様だ、貴様だぞ、彼を殺したのは……」

ヴェロン コカールは憤然として身を振り攢いだ、彼はその大きな拳固でマルクの瘦せた胸板をどやした。彼を一つの卓子の上に投げ飛ばした。マルクはコーヒー皿の上に尻餅をついて、ビールがひつくりかえつた。抗議の叫び聲のうちに闖入者はたちまちつまみ出された。人が群りはじめた歩道から、マルクは、ヴェロンが飛び出すような眼をして拳固を示して割れ鐘のように怒鳴つてゐるのを見た。「二度とやらないようにしろ、馬鹿野郎！ 警察に逮捕させろぞ……」